

稲作生産情報第5号（要約）

令和5年7月5日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

-
- 適切な水管理で幼穂の保温と根の老化防止に努めよう！
 - 適正追肥で食味・品質にブレのないお米を生産しよう！
-

1 生育状況と生育の見通し

水稻の県生育観測ほにおける6月30日現在の調査結果では、平年と比較して、「つがるロマン」は、草丈がかなり長く、茎数がかなり多く、「まっしぐら」は、草丈がかなり長く、茎数がやや多かった。

葉数からみた生育進度は、平年より「つがるロマン」が2～3日程度、「まっしぐら」が3～4日程度進んでいる。

今後、気温が平年並に推移した場合、幼穂形成期（主茎の幼穂長2mm）は、「つがるロマン」は津軽地域が7月7日頃、県南地域が7月9日頃から、「まっしぐら」は津軽地域が7月3日頃、県南地域が7月5日頃からと予想される。

出穂期は、「つがるロマン」は津軽地域が7月30日頃、県南地域が8月1日頃から、「まっしぐら」は津軽地域が7月27日頃、県南地域が7月29日頃からと予想される。

2 水管理

中干しは幼穂形成期までには終える。中干し中に低温が続くことが予想される場合は直ちに入水し、水深5～6cm程度で稲を保温する。

充実した花粉の数を増加させるため、幼穂形成期から10日間は、気温の高低に関係なく水深10cm程度の「幼穂形成期深水かんがい」を行う。

穂ばらみ期（おおむね出穂前15～7日頃）は低温に最も弱い時期なので、「幼穂形成期深水かんがい」終了後に平均気温20℃以下、最低気温17℃以下の低温が予想される場合は、15～20cm程度の深水管理を徹底し、幼穂を保温する。

高温が続く場合は、4cm程度の水深にして、時々水の入換えを行い、根の老化防止に努める。

地耐力が低いほ場や中干しができなかつたほ場では、葉耳間長4cm（おおむね出穂7日前）から出穂期までの期間に落水し、地固めを行う。なお、葉耳間長4cmから出穂期までの時期に低温（平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想されるときには深水管理とする。

3 追肥

幼穂形成期を確認し、葉色の低下を確認して、稲の生育に合わせて無理のない追肥を行う。

幼穂形成期の葉色が濃い場合は、減数分裂期（幼穂形成期後10日）までに葉色の低下を確認してから追肥する。減数分裂期を過ぎてからの追肥は、食味の低下を招くので行わない。

4 病虫害防除

斑点米カメムシ類の発生密度を抑制するため、7月中旬までに水田周辺の雑草地などの草刈りを地域ぐるみで行う。また、畦畔（けいはん）の草刈りについては、水稻の出穂7日前までに終える。

補植用の苗は葉いもちの発生源となるので速やかに処分する。

※ 薬剤散布上の注意

農薬を散布する場合は、薬剤の使用時期、使用量、使用回数を遵守するとともに、近隣の農作物に飛散しないようにする。

また、飼料用米等は、使用できる農薬の種類や使用時期等を指導機関や契約先に確認し、ドリフト対策を徹底する。



報道機関用提供資料	
担当課 担当者	農林水産部農産園芸課 稲作・畑作振興グループ 総括主幹 成田真樹
電話番号	直通 017-734-9480 内線 5073
報道監	農林水産部 次長（農商工連携推進監） 成田澄人 内線 4966